

●図書紹介●

『状況倫理への「臨床」教育学』

高野 成彦 著

本書は、著者のレフェリー・ジャーナル掲載論文を基にして編まれたものである。高野氏の前著『教育的課題としての状況倫理』（青磁書房、2000）が氏の教育論の全体像を示したものであるとすれば、今回は、高野氏のアンソロジー（選集）とでも言える作品である。それだけに、各章の独立性は高く、初めから全体を通して読むもよし、各章のタイトルを見て自分の興味・関心にもとづいて読み始めるのもよし、という読者の「楽しみ」が与えられている。もちろん、本書を通底するテーマは前著から引き続き一貫している。それは、「〈状況〉を視座とする独自の『臨床』教育学の構想」である。

本書は、4部から構成されており、各章は通し番号になっている。ここで、各章のタイトルを紹介しておこう。「第1部 状況倫理の概観」、内容は、第1章 学校現場における状況倫理へのアプローチ、「第2部 哲学的『臨床』の構想」、内容は、第2章 ガーダマーによる「臨床」教育学の視座、「第3部 学校現場における哲学的『臨床』の実際」、内容は、第3章 〈学校の法理〉臨床、第4章 自生的秩序と正義感覚、第5章 学校の秩序分析試論—ロールズの視角—、第6章 教育実習録に見る「臨床」教育学の視座、「第4部 『臨床』教育学の可能性」、内容は、第7章 状況倫理への「臨床」教育学の視座、となっている。なかなか興味深いテーマが並んでいる。

前著はかなり「噛み応え」のある著作であったわけだが、今回は私もやや余裕をもって読み進むことができた。高野氏の「現場にあって哲学する」姿勢と手法に大いなる敬意と少なからぬ羨望の念をもっている私からすれば、とくに本書の後半部分第3

部・第4部の各章を、文字どおり「興味深く」読むことができた。

本書では、たくさんの問題提起と「ことば（概念）」の提供がなされ、私には学校現場の諸問題の本質を読み解くヒントが与えられた。たとえば、〈学校の法理〉〈不文教育法〉〈互惠性に基づく教育活動〉〈自生的秩序〉〈正義感覚〉〈学校生活の基本ルール〉〈教育実習学〉等々……、印象に残った「ことば」だけでも枚挙にいとまがない。このなかでも私は、とくにロールズの「正義論」に関わる記述・援用からたくさん示唆を見出すことができた。とにかく氏の学習の質・量の豊富さには、圧倒されっぱなしであった。

最後に、「『状況倫理』を学校現場で問うことによる『臨床』教育学の構想」について私なりの理解を披瀝したい。その適否は、本書を読まれた方の判断に任せたい。

人間が相互依存的な存在であるということ自体が見えなくなってきてしまった現代において、あえて、他者との関わりのなかで生きることの意味を問うのが、高野氏の主張する「臨床」教育学の立場である。氏は、その「臨床」の視座として、〈善さ〉から〈ふさわしさ〉へのシフトを説く。そこでの教師の役割は、子どもが、状況のなかで〈ふさわしさ〉を探ることができるように「成長」を支援することである。それによって、教師と生徒の関係はどのように変わるのか、さらには、学校はどのように変わり得るのか。その省察が、結局は学校の現実を改革する構想へと結びついていくのである。

(上越教育大学 木村吉彦)

●青磁書房、B6判、152頁、1,800円(本体)